



より良い未来のために

栃木県立宇都宮工業高等学校 2年 船山 真里

訪問先で出会ったラオスの方々はみんな優しく、何よりも家族を大切にしていた。経済的な豊かさがなくても、心のゆとりがあり、それは素晴らしいことだと感心した。特に、現地で出会った子供たちの輝く笑顔は忘れられない。

しかし、不発弾処理現場の見学では、一番多い不発弾の被害者は子供だと聞いて、とても胸が痛んだ。処理後の不発弾を手にとってみたが、ずっしりと重く感じた。一つの爆弾に約三百個もの球が入っていると聞き、衝撃だった。これが子供に当たったら一生その子を苦しめるに違いない。ラオスには無数の不発弾が埋まっていて、今もその処理に追われている現実を知らなかった自分を恥ずかしく思う。

だから、今すぐにでも私にできることならなんでも協力したい。そこで、まず校内で今回の海外研修についてプレゼンテーションの場を設けて、高校生にラオスや不発弾処理などに興味を持ってもらうことを決めた。

今回の研修で、日本製の金属探知機が使われていることや、インフラ整備において日本人が活動していることなど、様々な分野でたくさんの日本人の活躍を目の当たりにし、私も将来、持続可能なまちづくりに携われるよう、今通う工業高校での勉強をもっと頑張りたいと思った。

もし今回の研修がラオス以外の国だったら、私とラオスは遠い距離にある未知の国だった。この機会を設けていただいた JICA の皆さんには本当に感謝し、いつか必ず恩返しをしたい。